
Main chapter in Series of Lour ラウルの少女が歩む世界

心機一転気合い一発！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Main chapter in series of Lou

「ラウルの少女が歩む世界

【Zコード】

N2633T

【作者名】

心機一転氣合い一発！

【あらすじ】

警告！ この小説にはタグが示す通り、暴力シーンが『多く』含まれております。苦手な方はご注意ください。

ラウル族の少女が歩む世界シリーズ本編 とある異世界。そこでは、その全員が、先天的に特異な能力を秘めていると言う、ラウル族と呼ばれる種族が、圧倒的な迫害を受け続けていた。隠れ住むこと今までしても、仮初の平穏な毎日を過ごすことだけしかできない。そんな中、一族の中でも、類まれな能力を持つ少女が、奴隸の

身分に落ちた。隙を着いて、逃げ出す少女。最初は、それは小さな歪でしかなかつたが、歪は大きくなり、ついには世界を大きく揺るがすことになる。これは、そんな少女が歩く、異世界の物語である。

第一回　日常の終わりは、日常の始まりに

その日、病的なまでに白い肌に、真っ白な髪、血のように不気味な赤い瞳を持ちながらも、見る人によつては絶世の美女にも思える少女、レイル＝サルヴァーンは、魚釣りをするため、人気の無い森の中に作られた集落の付近を流れる、沢に出かける予定でいた。それにしては、若干遅くまで寝ていたが。

レイルは目を覚ますと、ベッドから下り、化粧台にある鏡を見て、引き出しの中にあつた櫛を使って梳きはじめた。

膝くらいまである髪を櫛で梳くのには、かなり時間がかかる。長閑な村では、怒られても文句言えない時間まで寝室にいる彼女を、食事を促しに呼びに来るのは母親だ。

「起きた？　ご飯出来てるから」

そんな言葉を相槌を打つて聞き流し、髪を夢中で梳く。彼女にとって、それはその日の予定に思いを馳せる、至福の時間であつた。長閑な集落でも、毎日が楽しく感じることが出来る。何せ、自然が豊富で、それを利用した遊びはいくらでもある。

釣りは、その中の一つである。

そんな集落ではあるが、周囲に人気がない故に同種族のもの以外では他の人里との交流もあまりない。

そのような立地条件の場所に集落を築いた理由は、専ら集落に暮らしている人々の種族の特徴にある。

集落に住まう人々は、その全員がラウル族という種族である。

ラウル族は、人間にそつくりの容姿で、唯一の違いは背中にあるラウル族特有の『ラウルの紋様』と俗に呼ばれる痣のような斑点の有無だ。黒子とは違い、それは木々の葉のような緑色をしており、暗闇では優しげな緑色に発光する。

そして、最大の特徴は、その力にある。俗世間では『秘術』と呼ばれるそれは、秘術などではない。

なぜなら、秘術ならばそれには決まった法則がある。だが、ラウル族が持つ力には法則などなく、その力を持つものにしか扱えない。他の種族でも、稀にそういう魔力では説明つかないような力、例えば『封陳紋』という、封魔（魔法や魔力を封じる特殊な力）を扱うことが出来る力や、言靈使い（発言した通りの自称を引き起す特殊な力）等があるが、ことラウル族の所持率百パーセントには遠く及ばない。

ラウル族を除いてのトップ、魔族であってもせいぜいが千人に一人いればいいほうだ。

ラウル族は、そういう魔力ではない特殊な力、総じて特異能力を必ず先天的に持つて生まれて来る種族なのである。

なのであるが、そんな特性を持つが故に、彼女達はその力を求めて、世界中から狙われることとなり、今では隠れて住むことしか出来なくなっている

髪を梳き終わると、食卓へ向かう。レイルの寝坊のおかげで、若干遅れたが、いつものように、朝食が始まった。

食事が終わると、早速といわんばかりに、レイルは自力で作った釣竿を持って、家を飛び出し、村へと飛び出して行った。

レイルの両親は、この日を境にレイルの姿をしばらくの間見れな

くなるなど、思つてもみなかつたといつ。

村の付近の沢へと向かう途中。幼馴染の、カイとリューイの兄妹と会つた。八歳のリューイにとつて、十四歳のレイルは姉貴分な存在であつた。その八歳年上、つまり十六歳のカイにとつても、レイルはよき友、といつべきか。

ただし。カイは種族が受け継ぐ力に恵まれなかつたのか、あまり生活には役立たないし、同種族からも疎まれることが多々ある。彼の特異能力は封能結界といい、彼の周辺では、たとえ『絶対』の力を持つレイルであつても、能力はかなり制限されてしまう。ただし。それは結界の有効範囲内だけであり、結界の外からならカイにも能力は通用するのだが。とにかく、ラウル族からは若干嫌われる能力であるが故に、

逆に力に恵まれたレイルが羨ましくて仕方がない。

そのため、ことあるごとにレイルに悪口を言うのだが。レイルも、それを知つてゐるので、あえて突き放した態度はとらないでいる。

「レイルお姉ちゃん、今日は沢で釣りでもするの？」

「そうよ？　といつても、必要以上には獲らないで、必要な分を獲つたら、あとは釣つてすぐに逃がすつもり」

「ちえー。いいよな。力が強い奴は。そんなことわざわざしなくつても、お前なら魚を瞬間移動させれば済むだけの話だらう」

「それじゃあ釣りじやなくて乱獲よ。まあ、釣りも魚達には迷惑極まりないだろうけどね。そだ、カイ達も一緒にどう？」

「行く」

「もちろんだぜ！」

「じゃ、行こう。」

今日は話しあ相手がいてくれて良かつた、これでいつもよりもう少しに樂しくなりそうだとレイルは思った。

その能力ゆえに、魚達の思考までもわかつてしまつ彼女にとっては、むしろ釣りの時は彼についてほしくらいだった。もつとも、能力を使わなければ済む話なのだが。あえて使わないように心がけるよりかは、そういうふた具体的な制約があつたほうが、レイルとしても心置きなく楽しめるものである。

「この時期なら、アルキス（こちらでいう鮎のよだな魚）の塩焼きが一番上手いんだよな」

「あ～、それは言える。あれはおいしいよね～」

「私もあれは好きかな」

「ははは、これは今日はアルキスが取れたら塩焼きにするしかないですぞ～、姫」

「そりだねえ……あー、『めん。……塩、持つて来れば良かつたな

素直に塩を持ってきていいないと申し出るレイル。「冗談で言つたために本気にされたカイは、ビーブ!」まかそつかと考へ、こいつ返した。

「馬鹿言え。お荷物になるだらうが」

「……。でも、塩だけじゃ大して荷物にならないよ?」

「あ、そーいえばそーだな。ははは」

「ふふふ……」

そういうて、そりだねえといふといふ森の木ではあれがたくさん取れる、とか、今の時期はあの猛獸が出るからあの辺はよしておこうなどいふ会話で盛り上がりながら、沢にたどり着いた。

沢に着いた、までは良かつたかも知れない。そこまでは、レイル

の予定通りであった。

だが、そこには先客がいた。

一人は、燃えるような赤い髪に、漆黒といつ言葉こそが似合ひ黒い瞳の女性だった。

黒い瞳。その特徴を、レイル達は知っている。それは魔族であつた。ラウル族、唯一の交易相手。ラウル族以外で、一番特異能力を持つ可能性が高い種族。

『さつさと立てー!』

『……放して……お願いだから……』

だが、その女性の首、手首には、黒く、光沢がある輪……俗に言う首枷が嵌められている。傍らには、女性が持つにはたくさんすぎる荷物。そしてお金の入った袋。ようは行商人である。

そして、首枷につながる鎖を引いているのは、どっぷりと太つた、いかにも金に目がなさそうな醜悪な顔つきの男性である。

「何、あれ……」

「マジ、だろ……最悪だ……」

「え……？　まさかー！」

予想は半分ついていた。だが、過去にそれとの遭遇歴があるというカイの『最悪』発言から、それを現実として受け止める。

『……ツー!』

『さつさと立たんかー!』

村では、正義感があると人気だったレイルは、ただ打ち据えられる女性を、見ていられないとばかりに、立ち上がりうつとする。だが、それを制するものがいる。

「馬鹿か！ いつものお前ならともかく、今日はやめておけ！ 僕と一緒にやあ無理だろ！ 能力だって、万分为一も使えないだろうが！」

「でもー。」

そうしている間にも、摩族の女性は痛みに耐えかね、とうとう男の言葉に従う気になつたようである。

そして、付近に止めてある馬車へと、導かれ、そこで足を止めた。

『さつあと入れ！』

再び抵抗の意を示す女性に、容赦ない一撃を食らわす男。そして、押し込まれる女性。

それらを見ていたレイルは、ついに本氣で怒り出した。

第一回 報酬より依頼を重視するは裏便利屋

この世界には、奴隸制度というものが存在している。その対象となるのは、上は貴族から下は貧困層まで、実に幅広い。

そして、その奴隸制度こそが、ラウル族が隠れ住む最大の理由で、またラウル族こそが、奴隸制度誕生のきっかけであった。

強い力を持つもの達の行く末は、摔倒されるか、非難されるか、そしてそんな力をどうにかねじ伏せて支配するか。ラウル族に対して行われた行為は、ねじ伏せることだった

「何だお前は？」

「さつきの人を放して！」

突如現れたレイルに、大した頓着も示さない男。そんな男に、女性の解放を求めるレイルであつたが。当然、男のほうも、こいつた自体に何の対処も打つてないわけではなく。

突如、レイルを横から来た衝撃が襲う。

「あ……う、」

殴り飛ばされ、着地した地点から五メートル程転がつてやっと止

まる程の衝撃に突如襲われたレイルは、何とか立ち上ることが出来た。

が、すぐにその後ろに回られ、背後を取られた。いや、元々数名、人員が用意されていたのだろう。そして、その手に持つもの 手枷と首枷に目を止め、距離を取ろうとするが、

「……、」

そうする前に素早く襲撃者の手がレイルの腕を後ろへ捩りあげた。

「う……く、つ！」

痛みに呻く。そして、もう片方の腕も、後ろに回された。手早く後ろ手に固定され、逃げる間もなく首枷も嵌められる。まさに、瞬く間といえる手早さで。枷に繋がる鎖を掴まれ、最早、レイルは逃げる術を完全に失ってしまった。

（油断、した……。一人じゃなかつた、なんて……）

早まつた、と後悔したところで、もう遅い。これから始まるであろう、地獄の日々を思うと、泣かずにはいられない。

それから時間が経ち、一騒動終つた沢には、静寂が漂つ。レイルは、騒動の末、奴隸商達に気絶させられていた。傍らには、女性が「レイルちゃん……ごめんなさい……私のせいだ」と泣きながら、しかし何もできずに座している。

レイルがその身を拘束されてから、若干静寂が場を包んだ。

その憎悪をたっぷりと含んだ視線の先には、奴隸商の、でっぷりと太った男がいる。

男は、金目のものを探して女性のに物を漁っていたが、殆ど何も見つけられなかつたようだ。そして、そのごく僅かに見つけた価値あるものの一つが。

「これは……ラウル族の間で使われている硬貨……。ということは、成る程成る程……この付近に、『ある』わけだな……」

「……ッ！？」

ラウル族に纏わる情報である。

だが、それに反応したレイル。集落に住んでいたレイルとしては、自身が最終防壁なのだ。黙つて見ているわけにはいかない。

「させない！」

「ぐふああー？ 貴様ア……」

「……くう……、はあ、はあ……貴様、なんかに……集落には、行

かせない！」

再び沸き起る、反抗心。

だが、それも決して長くは続かず。最初の一撃が、限界だつた。

まず、カイの封能結界の範囲からは既に抜けているが、代わりに先程付けられた枷によって、結界の足元には及ばない程ではあるが制限がかかっている。

「くつくつく……どうだね、封能の首枷は。特異能力を思うように扱えないだろ?」

「くつ……はあ……、はあ……」

その制限のせいで、普段よりも酷く過剰に体力を消耗する。既に、レイルは立つのも精一杯の状態だった。

それに加え、

「……見ろ」

「な、に? ……あつ!」

女性を人質に取られていたのだ。

さらに、

「今、俺とお前は一方的ではあるが思考が若干リンクしている。下手に力を使えばどうなるか……わかるよな?」

「……、く……」

能力を使用しようとしても、首枷が『所有者』にその旨が送られてしまう。

つまり、

女性を人質に取られていては、現状では下手に能力を使えないのだ。その上、枷には能力を使っても効果を為さない。

どうか、みんな無事に逃げて、と。

特異能力で、カイが既に避難を促したこともあり、集落には人居ないことを知っているレイルは、そう願うことしか出来なかつた。

「くそつ！ 集落は見つけたが、人っ子一人居なかつた！」

戻ってきた奴隸商は、そう悪態をついた。

そしてレイルを見ると。

「こいつー くそつー よくもまあ、余計な真似をしてくれたものだな！」

「あう！

ツ、う.....ああああああああ.....

最早、その扱いは言葉に出来るようなものではなく。

容赦ない暴行を受けたレイルの意識は、既に朦朧としていた。

「ごめん.....本当に、ごめん、」

女性は、せめてと思い、治療魔法を使って、応急手当をした。

「.....この少女には若干同情するな.....」

キツ.....と、鋭い視線で監視をしていた男の一人 レイルを最初に横合いから攻撃した男を睨む。

「だつたら！ 何で見逃してあげなかつたんです……。たつたの……、たつたの十四歳なのに……」

「何つ！？ そんな子供までも捕まえるとは聞いてないぞ？」

……」これは契約違反だな……「

あの野郎、騙しやがつたな、と反感を口にする男に対する視線を弱めることなく、容赦無く言い放つ魔族の女性。

「契約……？ ジゃあ何です、今更になつて、私達を解放するのもいつのですか！」

だが、女性の言葉に、男は不適な笑みを浮かべた。

「クックック……俺を見ぐびるなよ……？ この裏便利屋……。信頼を裏切ればどうなるか……わかつててやつたのだからな……」

そのどす黒いオーラに、女性は、怒りを忘れて、ただ男が何をするつもりなのか、その心中を計り兼ねるとばかりに見つめた。

「……う、ん……」

レイルの意識が覚醒し、若干身じろいで起きたのはその最中だつた。

第三回 それは予知夢か否か、訪れた好機

「こゝは何処だらう……。

暗い……。

私、どうしたんだっけ……。

『レイル……息災を祈ってる。じゅあな』

カイ?

『レイルお姉ちゃん。元氣でね! 体に氣をつけてね?』

リューイ……?

二人とも、どこ行くの? 待つてよ。

『お前なら、きっと俺達のところへ戻つて来る。』

『信じてるからね、レイル!』

お父さん? お母さんまで!

『じゅあな』

『どうか、貴方を置いていく私達を許して……』

待つて!

私も行く！ 皆についてく！

ジャラ

え……ツ！？ いや！ 離して！

『お前はいつちだ！』

セイサヤ一セニ

「レイル！？」

「……無理もない。随分うなされていたようだからな」

奇声を上げて飛び起きようとするレイル。 だが、腕を拘束され
いては一人では簡単には起き上がれない。

「……主にその理由を作つたのは貴方方ですけどね」

冷たく言い放つ女性を余所に、レイルが辺りを見渡す。そこは、小さな小部屋のような感じだった。
再び起きようとして、しかし腕を動かせない。
何度か試して、漸く自分の腕の拘束具に気づく。
そして、動かす度に鈍痛が走ることにも気付く。

「……ここ、は……ツ！？」

「奴隸を運ぶ馬車、だな。腕は無理しない方がいい。俺の全力を受けたんだ。腕がへし折れてもおかしくない」

「念のため、応急手当はしておいたから、顔とかお腹に受けてる打ち傷とかは大丈夫だろうけど……折れた腕だけは無理ね……」

「……ツ！？ ミリ、ア……？」

何故ミリアがここにいる？ そもそもここは何処だ？
自分の記憶と、ぼんやりと聞いていた男の説明を聞いて、思い出す。

(……奴隸……そうだ、私……そうだったんだっけね……)

助けようとして、結局はミイラ取りがミイラになってしまったことに、苦虫を噛み潰したような顔をするレイル。

(結局、人一人、親友の一人も私は救えなかつた……)

幼少時代から、親子連れの行商人がよく集落に来ていた。だから、自然とその子供と仲良くなつていった。
それが目の前の女性、ミリアだった。

悔やんでも仕方がない。どうにかして、逃げ出せないかと考えながら、ミリアに話しかける。

「最後にあつたのは一年以上前……」

「そうだね……こつちも、猛獸にやられた父さんの後継ぎとか、ごちゃごちゃした後始末があつたから……」

「えー？ おじさん、死んじゃつたのー？」

「…………」

「まさか。でも、行商はもう無理だから、実家で万屋^{よのや}さんでね」「そり……。ところで、その服……」

ミコアは、いつの間にか麻布で作られた粗末な服を着ていた。

「……沢を出発してすぐに、無理矢理着せられた。そこの男にね。貴方も着せ替えられてるわ」

驚いて自身を見てみれば、確かにほぼ同じ服を着ていた。はあ……と溜め息をついて、改めてこのまま何もせずにことが進行した後のことと考えて、ゾッとした。

(絶対に、逃げきって見せる……もちろん、ミリアと一緒にー。)

続いて田にはいったのは、先程対峙した時とは打って変わって、雰囲気がいかにも味方ですという感じに変わった男。自分がされたことを思いだし、敵意丸出しに睨みつける。

ミコアも、疑問の眼差しでそいつを見るが、やがて。

「『裏便利屋』……聞いたことはありましたか、そうですか……。『死に神のバンドリー』は貴方だったんですか……」「裏……便利屋？ 死に神の、バンドリー？」

聞き慣れない単語に、レイルは首を傾げた。長い髪がそれにあわせて若干揺れるのに、バンドリーは若干顔を赤らめた。

(か、可愛い……つと、ちょっと待て。相手は十四歳相手は子供自分は百一十五歳年齢差百十一歳自分はノーマル自分はノーマル……、)

「……ミコア」

「……ん？」

若干怯えた目で、レイルはミコアのほうへ向き直り、ついでそちらへ移動した。ただし、バンドリーは顔を向けずに。

「……なんか非常に貞操の危機を感じるんだけど」

「……、」

ミコアもバンドリーを見る。

そして、頬を赤らめながら、必死に「ノーロリコンノーロリコン」等と唸つているところを見て、若干哀れんだ目で一瞥して、

「（……あれば重症ね……。きっと裏家業だからまともに恋愛したことないんだよ。レイルはダメだよ？ あんな根暗な仕事してる人と付き合っちゃ）」「（わかった気がする）」

勝手な憶測のもと、場に静寂が訪れる。しかし何処か空気が重い。よく見れば、男に敵意たっぷりの鋭い視線を送っていたレイルも、打って変わって相手を哀れむような目で見つめている。

「待て待て、何で急にそんな哀れむような目で見られないといけないんだ！」

必死に抗議するも、年頃の少女の妄想、しかも共鳴反応を起こしてより強固になつた思い込みを解くのに、數十分かかったという。

そんなこともあってか、バンドリーと若干打ち解けたレイルは、目が覚めるまでこのことを聞いていた。

最も、事態が急変してからレイルが起きるまで、対して時間は経つていなかったが。

「で、結論からすれば、子供は狩らないというあなたの条件を彼は破つたって言うのね？」

「ああ。それについては俺とて奴を許す気には馴れん」

「よく言うわよ……自分で捕まえといいてさ……それに、そんなこといつてるけど、ミリアだつてまだ十六なんだよ？」

「……、はあ……。奴め……まさか今まで相手の年齢を偽つて俺に報告してたわけじゃあるまいな……」

今まで奴隸狩りに携わつてたんだ、と若干呆れたような目で見る。

「でもや、そんなのつてどうやって見極めるの？」

「『呪い』属性値に恵まれた奴なら出来る。俺は残念ながら『補強』属性にしか恵まれなかつたからな……。狩る相手の情報については全て彼に任せていた」

「……今回が初めてじゃなかつたんだ……」

ちよつと悲しそうな目をするレイル。そして、問い合わせる。

「じゃあ、彼は知つてたわけなんだね？　その、私達の年齢を……

「まあ、俺を怒らせたときの恐さを知つているならな」「……なんて卑劣な奴……」

「で、貴方は奴に報復をする、と。私達は奴隸になんかなりたくない

いから逃げる…… その成功＝奴への報復、か

「なんせラウルを逃がすってことは大きいだろうな……。利害は一致してるとと思うが?」

「……方法は?」ミリアは期待を込めた目ではなく、不安そうな顔をして、「封印の枷つて、魔法を封じて、特異能力を制限するんですね? この状況じゃ私とレイルは戦力外。護衛は貴方のほかに馬車の外にあと一人。私達一人を守りながら戦うのはきついのでは?」

「……まあ、きついのはきついが、不可能ではないな。望みがあるとすればレイルか?」

「え? 私?」

「ああ、」バンドリーは手に持った鎖の先端にある輪を弄び、「お前の能力によつては、成功する可能性はグッと上がるが……。因みにこの輪はその枷の制限を制御する働きを持つ。奴は俺を信頼しきつてお前等の監視に選んだ。それを逆手に取る。制限を解除すれば、恐らくは能力を存分に使えるはずだ。さすがに錠の部分には別に魔法が掛かっているから解錠は鍵が無いと出来ないがな」

「だとしてもさあ、」今度はレイルが疑問顔で、「こっちの手枷はどうなの? こっちにも魔法が掛かってるんじゃないの?」

当然の疑問である。折角の獲物を逃がさないために、首枷だけでも十分過ぎる拘束力があるのに、手枷までするくらいだ。手枷にもなにか仕掛けがしてあってもおかしくはない。

だが、

「いや。奴がケチつたせいで、手枷は普通の手枷だ。首枷の制限さえ解けば、制限は無くなる」

「ふうん……」

「……で、どうなんだ? お前の能力は、どんなもんなんだ?」

レイルは最後に、目の前の男が主張するそれが本當かどうかを吟味するために、辛くなるのを理解していて、敢えて能力を使う。そして、裏がないことを確信すると、不敵に笑い出した。

「ふふふ……聞いたあとで、制限を再びかけるのは無にしてよ?」「ああ。それならば、先に制限解除をして輪を渡しておこう」

バンバリーは、鎖の先端の輪を口元に持つて行き、こう呟いた。

「【汝に命ずる……。その力を以て、汝が許す限り我が力と為せ】」

ぼう……と鎖から首枷へ、まるで鎖を伝づかのように光り出した。そして、数秒経つて、おさまった。

バンドリーはその手にもつ輪をレイルの手に掴ませると、若干離れた。

「それで。お前の……いや。コホン……『裏便利屋』バンドリーとして『質問いたしますが、貴方の御力について……』教授いただけませんか」

「……私の能力は、ね……」

若干照れながら、しかしハキハキと答えるレイルを、後にミリアはこう評したといふ。

「あれは、恋する乙女の眼ね!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2633t/>

Main chapter in Series of Lour ラウルの少女が歩む世界

2011年10月6日02時17分発行